研究ノート

マグダラのマリア信仰とサント＝ボーム山

――宗教文化財研究についての覚書[1]

奈良澤　由　美
城西大学　現代政策学部

A Note on the Sainte-Baume and the Cult of Mary Magdalene in Provence

サント＝ボーム山は白亜紀の石灰岩の岩山で、東西 12 km の長さ、標高 1000 m ほど。その山塊は、フランス南東部、ブーシュ＝デュ＝ローヌ県とヴァール県の境にそびえている。南斜面はなだらかであるが、北斜面は急な岩壁から成り、その岩壁の北側には豊かなブナ林が広がる。プロヴァンス地方の伝説によれば、マグダラのマリアが北の岩壁にある洞窟で 30 年間の隠遁の苦行の生活を送った。長い間、この山はマグダラのマリア信仰の中心的な巡礼地であり、プロヴァンス地方を代表する聖地として、数多の巡礼記や旅行記に記されてきている。

サント＝ボーム山のマグダラのマリア信仰の歴史を概観しながら、宗教文化財をめぐる学術研究と信仰の問題をここで考えてみたい。

学術研究と信仰

17 世紀以降、プロヴァンス地方のマグダラのマリア伝説の真贋をめぐり激しい議論が戦わされた。ジャン・ド・ロノワ[2]、あるいはルイ・デュシェーヌ[3]に代表される、プロヴァンスの聖人伝説の史実性を否定する論考が発表され、プロヴァンス地方の歴史編簿の丁寧な見直しが進められたが、数百年に及んだこれらの論争は、肯定側否定側のどちらにおいても、それらの議論に冷静さを欠いていることが特徴であると、マグダラのマリア信仰についての妙々たる博士論文を記したヴィクトル・サクセルは述べている[4]。史実性を否定する学者たちは、たとえその批判が十分に論拠ある場合でも、その論調は皮肉によってとげとげしい。一方、肯定する学者たちは篤い信仰心を露にする。

サント＝ボーム山は、西欧におけるマグダラのマリア信仰の最も古い礼拝所であると、長い間信じられてきた。しかし、マグダラのマリア信仰の中心的な巡礼地となったのは、実際には 1279 年のサン＝マクシマンでのマグダラのマリアの墓の「発見 *inventio*」が契機であった。1279 年、サレルノの若き王子（のちのアンジュー伯シャルル 2 世でありナポリ王カルロ 2 世）は、サ

ント＝ボーム山の北20 kmに位置するサン＝マクシマンの半地下墓地を発掘し、そこにマグダラのマリア、聖マクシミーヌス、聖シドニウス、聖女マルセルの墓を「発見」した。そして、マグダラのマリアはサント＝ボーム山の洞窟で30年間贖罪の生活を送ったあと、天使によってサン＝マクシマンの墓所に運ばれて葬られたのだという伝説が広く信じられるようになった。

こうした「発見 *inventio*」は、現代においても行われ得る。たとえば1960年代のフェルナン・ブノワのマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院クリプトでの発掘は、3世紀の *martirium*（殉教者の墓）の発見として解釈され[5]、マルセイユの人々の信仰心を掻き立てた。マルセイユの聖ウィクトルの史料を綿密に研究したジャン＝クロード・ムリニエは、2000年に一般向けの書物を出版したが[6]、それは聖ウィクトルの墓の実在を証言するものであった。それに対する2001年のミッシェル・フィクソの論文は、信仰心を背景としつつ学術的でもあるこうした現代の「発見 *inventio*」への直接的な批判であり警告であったが、その論調は極めて厳しい[7]。

信仰と学術研究。宗教的な事物・事象を研究する際に、歴史的には両者が結びつきながら研究の発展を促してきたことは確かである。しかし、学術的真実の追及について、両者の結びつきは多くの場合弊害となり、両者の両立は難しい。なぜならば、信仰的真実が学術的真実と異なることは当然であるのだから。

一方で、ヨーロッパ、とくにフランスは「文化財」という概念を創設した社会であり、その保護と開発についての歴史が長い。「宗教文化財」について、さらにはその観光的意義について、すでにある程度の成熟した理解がある。また、実践的な信仰者は現在では少なくなっている。

そのため、キリスト教聖堂は、イスラム教や仏教など他の宗教空間と比較して、非信仰者である観光客が訪れることが心理的にも実際的にも容易だという印象を持つ。厳密に信仰生活が行われているいくつかの修道院を除いて、キリスト教信者ではなくとも、その礼拝の場所に入っていくことにあまり抵抗を感じない。

信仰的事象に関わる題材にどの程度まで学術研究は立ち入ることができるのか。たとえば、ユネスコの国際博物館会議（ICOM）の倫理規定には、神聖な意味を持つ資料についての所蔵、保管、研究、陳列についての言及が存在するが[8]、神聖な資料の研究は、「専門的な研究に従った方法で、かつ、地域社会、民族、もしくは宗教団体の利益と信仰を考慮に入れつつ行われなければならない」。そして陳列は「すべての人々が持つ人間の尊厳の気持ちに深い察知と尊敬を込めてなされなければならない」と述べられている。

神聖な意味を持つ典型的な資料として、たとえば聖遺物を挙げることができるだろう。聖遺物信仰は、民間宗教的要素が特に強いキリスト教信仰の形のひとつであり、古キリスト教時代より広く民衆に支持されてきた。聖遺物は歴史事象としても極めて重要な資料であるが、学術的研究対象になることが現在においても困難を伴う資料であり、その研究方法はいまだ進展途上にあるといえる[9]。聖遺物の真贋を論ずることは、信仰と相反することであり、もしも科学的分析を行えば、信仰者の感情を損じることになり得る。アルルの聖セゼールの聖遺物[10]など、いくつか

の重要な聖遺物については、近年真剣な科学的分析が行われるようになってきたが、ヨーロッパ中のキリスト教聖堂に安置される数え切れないほどの聖遺物について分析を行うことは、無粋かつ不徳な行為とも言える。

あるいは、先述のマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院であるが、そのクリプトにある「洞窟（グロット）」と呼ばれる岩斜面をくり抜いて作られた礼拝堂は、町の最も古い礼拝の場所と考えられ、マルセイユの人々の信仰心を担う場所となってきた。4 世紀初頭の殉教者である聖ウィクトルとその仲間たちの墓と、あるいはマルセイユの初代司教とされる聖ラザロと、さらにはマグダラのマリアの伝説と結びつき、神秘的な地下の礼拝空間として崇められてきた(11)。近年の研究により解明された事実としては、この洞窟は古代末期の石切り場に作られた集団墓地の一部であり、11 世紀に礼拝堂として改修された空間である。実際、マルセイユの人々の宗教的伝統と科学的現実との葛藤はいまだ大きく、たとえば学術研究の第一人者たちが記した一般向けのガイド本にも、やはり人々の信仰への一定の配慮が感じられる(12)。

このサン＝ヴィクトール修道院の「洞窟」がマグダラのマリアの伝説と結びついて新たに整備されたのは 17 世紀であり、ここにマグダラのマリアに捧げる祭壇と祭壇衝立が設置された。祭壇衝立は洞窟の岩壁の凹凸をそのまま背景の描写に盛り込んでいるのが特徴であるが、洞窟および岩という物質的な聖性が中世から近世まで共有されてきたことが興味深い。マルセイユでは、サント＝ボーム山に赴く前に、マグダラのマリアはこのマルセイユの洞窟に 7 年間籠ったと言われていた。

プロヴァンス地方のマグダラのマリア信仰

プロヴァンス地方には、ラザロとその姉妹であるマルタとマグダラのマリアについて、数々の伝説が知られている(13)。イエス・キリストが復活し天に昇ったのち、ベタニアのラザロとその姉妹であるマルタとマグダラのマリアは、パレスティナの地を追われ、マルセイユにたどり着いたとされる。別の伝説では、ラザロと姉妹たちは、ヤコブのマリア、サロメ、そしてイエスの 72 人の弟子のひとりでありベタニアの家の執事マクシミーヌスと共に、イェルサレムを追われてオールも帆もない小舟でプロヴァンスの海岸（サント＝マリー＝ド＝ラ＝メール）にたどり着いたという。ヤコブのマリアとサロメはサント＝マリー＝ド＝ラ＝メールにとどまったとされ、同町の教会堂の祭壇周辺をルネ王が主導して「発掘」し、1448 年 12 月 2 日に彼女たちの聖遺物を「発見 *inventio*」した。サント＝マリー＝ド＝ラ＝メールは、また、ジプシー（ロム）たちの聖女サラへの信仰の地としても知られる。サラはヤコブのマリアとサロメのエジプト人の召使であり、彼女たちに付き添ってこの地にたどり着いた、あるいはジプシーの長として彼女たちを迎えたとされる。サント＝マリー＝ド＝ラ＝メールでは、5 月にヨーロッパ各地からジプシーたちが集まり、聖女サラを記念する祝祭が行われている。もっともサラへの信仰が確認されるのはそれほど古くなく、ジプシーたちの聖女への勤行が定期的になるのも 19 世紀末以降である。

一方、ラザロ、マルタ、マグダラのマリアは、それぞれプロヴァンス地方の各町に布教のためにさらに旅立った。ラザロはマルセイユの最初の司教となったとされ、マルタはタラスコンの怪獣を制圧した。マグダラのマリアはサント＝ボーム山の洞窟で隠遁の苦行の生活を30年間送り、死期が近づいたとき、エクスへ赴き、エクスの最初の司教となったマクシミーヌスに迎えられ、エクスに埋葬された、あるいはサン＝マクシマンに埋葬された、という二通りの伝説が存在する。

これらのプロヴァンスの聖人伝説は、それぞれの聖人について各地方で別々に育ったと考えられており、それらの発展が確認されるのは12世紀以降である。たとえばエクサン＝プロヴァンスの司教座教会の創始者が聖マクシミーヌスとマグダラのマリアであり、彼らの墓がここにあるという信仰は、12世紀初頭に生まれ12世紀を通して発達した。

なお、マグダラのマリアの埋葬の700年後、ブルゴーニュ地方のヴェズレーの僧たちが、聖女の墓の存在を知ってエクスへ赴き、その遺骸をヴェズレーに持ち帰ったという伝説も知られている。とはいえ、ヴェズレーのマグダラのマリア信仰が飛躍的に発展したのは11世紀中ごろであり、エクサン＝プロヴァンスやサン＝マクシマンのマグダラのマリア信仰よりも明らかに早い。おそらく、非常に成功したヴェズレーにおけるマグダラのマリア信仰への対抗心から、プロヴァンス地方で同聖女への礼拝が宣伝されたと推定されている(14)。

1279年12月9日、「エクスの最初の司教である聖マクシミーヌスがマグダラのマリアの墓を置いた聖なる礼拝堂」がサン＝マクシマンに発見された。その墓所の南方に位置するサント＝ボーム山は、マグダラのマリアが埋葬される前に30年籠った場所と見なされ、それ以降、サン＝マクシマンとサント＝ボーム山がフランスにおけるマグダラのマリア信仰の中心地になる。

サント＝ボーム山のマグダラのマリアの洞窟

石灰岩の岩塊であるサント＝ボーム山は東西12 kmの長さに広がり、その北斜面は300 mから400 mの急な岩壁から成る（図1）。山とその周辺には、その地形および歴史が生んだ特殊な

図1　サント＝ボーム山遠景（筆者撮影）

生態系に育まれた森が広がっている。ウーバク（北斜面）側は、東西に長く広がる高い岩壁が南仏の強い太陽光を遮り、ある程度の湿度、冷気、日陰が保たれる。よって山の北側のプラン＝ドープ台地には、この地域には稀な多様で豊かな植生の森が育まれ、特にブナ、イチイ、モチノキ、カエデが茂る（図2）。一方南斜面には、典型的な地中海地域の植生が広がり、灌木林、エニシダ、アレッポマツなどが生える[15]。

マグダラのマリアが隠遁生活を送ったとされる洞窟は、北の岩壁の直下にあり、この場所の聖性はこうした豊かな森により護られてきた。教皇や王らは木の伐採、猟、あるいは家畜に植物を食ませることを禁じた。

フランス革命後、サント＝ボームの森は国有財産として没収されて国有地となったが、周辺の市町村や宗教団体の反対により、伐採や開発はある程度制限されていた。19世紀になると、社会はさらに世俗化し、宗教的感情からの保護の意識は薄れていったが、一方で自然を賛美し保護しなければいけないという使命感の高まり、あるいは観光資源への活用の観点から、いくつもの団体が森の保護を訴えた。「自然科学的に、歴史的に、そして観光的に」大きな価値のある場所であると保護の必要性が謳われた。しかし、20世紀前半まで、国有地の範囲は限られており、周囲の土地所有者たちは農林地として開発を続け、またマルセイユなどに住む人々の別荘地ともなっていた。1950～60年代になり、国が土地買収を進め、サント＝ボーム山系全体の保護がよ

図2　1930年頃のサント＝ボームの国有林のブナ林（Cl. Ph. Bauby）

うやく可能となった。近年の数十年間、地域の諸団体は国立公園への指定のための働きかけを活発に行っている。2017年にはフランス地方自然公園（PNR）へ指定された[16]。

こうした特別な地形と自然の魅力が、サント＝ボーム山の聖性を裏付ける役割を果たしてきたのだと容易に想像される。さらに、マグダラのマリア伝説の史実性を証明するための歴史的証言には事欠かない。ただしそれらの証言の信ぴょう性は現在では疑われている。

まず、1279年のサン＝マクシマンの墓所の発見時、700年と716年の聖遺物の真正証明書が入っていたとされている。そして17～18世紀の歴史家たちは次々にこの場所のマグダラのマリア信仰の古さを擁護する証言をしてきている。例えば、サント＝ボームの「巡礼日誌 *Journal*」には、816年に教皇ステファヌス5世の、878年にヨハネス8世の、9世紀末にはプロヴァンス王ボソン1世の名があると17世紀末の聖職者により証言されている。しかしそれがどのようなマニュスクリプトだったのか、当時の手によるのか、後代の付け足しだったのか、もはや知ることができない。日誌はフランス革命期の混乱で焼失した。

革命時には、フランスのあらゆるキリスト教関係のモニュメントと同様に、略奪と破壊の対象となり、特に1793年および1815年に激しい破壊を受けた。とはいえ、革命後も、いかにこの場所が著名であり、人々を引き付けたのか、サント＝ボーム山についての数多の巡礼記、旅行記、文学作品が証言している（図3）。信仰の場所であり巡礼の地であり、また訪れるべき観光名所でもあった[17]。おそらく現在でも一部の人々においてはそうであろう。しかし信仰の情熱はやはり現代において希薄となっており、その知名度も地方的なものにとどまっていることは否めない。現在はむしろ、その雄大な自然を楽しむハイキングやピクニックの場所としての魅力によって人々に親しまれている印象が強い。現在のサント＝ボーム山には遊歩道が巡り、サイクリングやハイキングを楽しむ場所として整備されている。

図3　アントワーヌ・ムニエ　『夕暮れのサント＝ボームの眺め』　1792年　水彩画（Source: Bibliothèque nationale de France）

2018年の復活祭翌日の月曜日、筆者はほぼ20年ぶりにサント＝ボーム山を訪れた。サント＝ボーム山と周辺全体に遊歩道が設置され、洞窟にたどり着く道筋はいくつもあるが、あまり標識は整備されておらずわかりにくい。火事と干ばつによって状態の劣化した木々が目についた。パーキングではピクニックをしている幾組かの家族の姿があった。

1516年にアルルの司教フェリエの主導により7つの礼拝祠が設置された「王の道」をたどり、標高886 mにある洞窟まで、細い道と階段を登っていく。洞窟に近づくにつれて、「静粛」を求める看板、喫煙や肌の見える服装の禁止を指示する看板が置かれており、信仰の場所に入っていくことが感じられる。ドミニコ会が護る聖域の入り口の門は崖の下にあり、ゴルゴダの磔刑場面を表す色鮮やかな群像が並ぶ（図4）。犬が中に入ることは禁止されており、数匹の犬が門の前に待機していた。門をくぐった後、イエスの墓詣での場面を表した群像彫刻が崖下の柵に囲まれた空間に置かれているのが目に入る（図5）。14世紀制作とされるこれらの彫像は、首や腕が破損したままの劣悪な保存状態であったが、マグダラのマリアの洞窟の聖域の中で筆者が目にした最も古い美術作品であった。

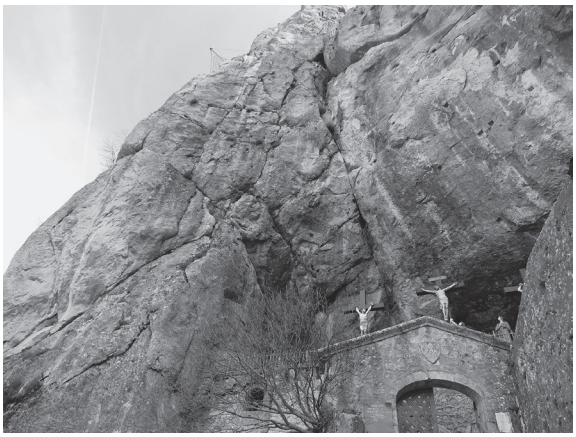

図4　マグダラのマリアの洞窟の聖域入り口（筆者撮影）

図5　イエスの墓詣の群像彫刻（筆者撮影）

礼拝堂として改造された「マグダラのマリアの洞窟」の入り口の扉は崖の直下にある（図6）。内部は暗く奥深く、岩壁がむき出しであり、中央に主祭壇が築かれている（図7）。主祭壇の祭壇衝立はイエスの磔刑とマグダラのマリアを表したL.-J.アレクサンドロの1860年の作品であり、主祭壇裏の瞑想する聖女像は、モントリウーのシャルトルー修道院のヴァルベル伯の墓（1778年没）のためにC.フォッサティが作った4人の泣き女の群像のひとつが移転されたものであった。礼拝堂の右奥には、やはりL.-J.アレクサンドロ制作であるサン＝ピロンまで二人の天使に持ち上げられていく聖女像が置かれ、礼拝堂の左側には1660年にアヴィニョンの大司教ド・マリニスから寄贈された聖母マリア像が立つ。

礼拝堂内部、入り口から見て右手には、下階に降りる階段がある。下階には湧き水を貯めた水槽があり、壁には水が滴れる音が響くように筒が上部に設置されている。下階の祭壇はいまではほぼ放棄されている状態にあり、埋葬のキリスト像の断片が置かれていた。19世紀後半の作品である十字架を手に瞑想するマグダラのマリア像が奥に置かれ、その手前の壁には、生まれることのなかった子供たちを記念して、子供の名前を記した多数の小さな石板が壁の一部にびっしりと貼られていた。

今回の訪問では登らなかったが、洞窟に至る道は途中で分かれ、標高994mの所にあるサン＝ピロンの礼拝堂に至る。礼拝堂はかつて大理石と彫刻で内装されていた。伝説によれば、恍惚の聖女は日に7回天使にこの場所に運ばれてきたとされる。

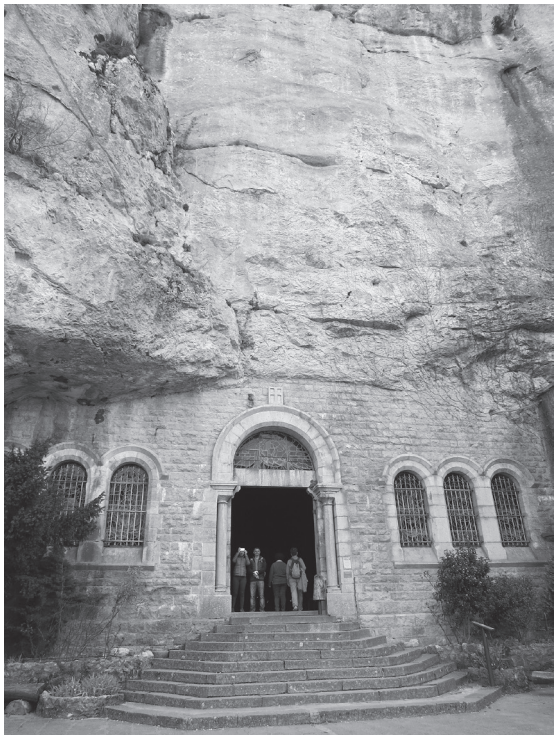

図6　マグダラのマリアの洞窟入り口（筆者撮影）

図７　マグダラのマリアの洞窟内部（筆者撮影）

マグダラのマリアの洞窟の聖域を訪問したのは復活祭後の月曜日であり、休日であったので、それなりの数の訪問客がいた。巡礼を目的とした訪問者よりも、ハイキングを兼ねて訪問する人々の方が圧倒的に多数であるという印象をうけた。外国人観光客の姿は少なく、地元地域の人たちを多く見かけた。聖域自体は20年前よりも整備されており、場所の神聖さを尊重することを促す看板が増えていた。

聖域内にはおそらくフランス革命期に受けたのであろう様々な破壊と破損の痕跡が残されている。革命前の時代には、キリストの埋葬と復活に関する群像をそれぞれ拠点として、マグダラのマリアに関係する種々の儀礼が行われたのであろうと想像される。現在の聖域の様相は19世紀に改修されたものであり、中世後期にまで遡ることができる遺物は稀であった。

サン＝マクシマンのサント＝マリー＝マドレーヌ聖堂

1279年にサン＝マクシマンの半地下墓地が発見されたのち、サント＝ボーム山の洞窟まで巡礼道が整備された。ほぼ20 kmの道のりである。伝説では、マグダラのマリアのサント＝ボーム山での贖罪の生活を送ったあと、天使によってサン＝マクシマンの墓所に運ばれて葬られたとされている。

1295年4月初旬に、アンジュー伯シャルル2世はドミニコ会修道院をサン＝マクシマンに創設する許可を教皇ボニファティウス8世から得た。3廊式教会堂の建築工事は1296年に着手される。発見された聖なる墓室は、クリプトとして教会堂の中央に位置するように設計された。14世紀には聖堂は未完であり、この墓室はいまだ外にある状態だった。一時中断されていた建造工事はアンジュー公ルネの指揮のもとで再開され、1532年に最終的に終了する。とはいえ西正面

と鐘楼は結局完成されぬままであった（図8）。聖堂内の北側廊にクリプトに下る階段が整備された。

クリプトとなった墓室は発見時のままに現在まで伝わっているわけではない。たとえば1860年、クリプト内の南部分に祭壇と聖遺物棚を設置するための改修工事が行われた。1884年には石棺が一度取り出され、横の壁が大理石で覆われるが、1932年に取り外される。4体の石棺は少なくともこの時期までは2体ずつ東西の壁に沿い置かれていたが（図9）、現在では、マグダラのマリアの墓に伝統的にアトリビュートされている石棺は、南の聖遺物棚の前に置かれている。

図8　サン＝マクシマン、サント＝マリー＝マドレーヌ聖堂西正面（筆者撮影）

図9　1932年頃のサント＝マリー＝マドレーヌ聖堂クリプト内部（R. Doré, « Saint-Maximin », *Congrès archéologique de France, 95e session, Aix-en-Provence et Nice, 1932*, Paris, 1933, p. 214）

これらの石棺は浮彫で装飾されており、4世紀末に年代比定される。近年の研究により、この半地下墓地は、4世紀後半から同世紀末にかけて、地元有力者が自分の領地に建てた家族のため墓であったのだろうと推定されている[18]。南北の軸を持ち、北側に入り口があり、おそらく半地下の状態だったと考えられる。大変裕福であったキリスト教徒の家族の墓であった。

5世紀制作と見なし得る線刻画大理石板が4体、クリプト内に保存されている。そのうちの2体の大理石板（1 m 20×0 m 80×0 m 04）は、それぞれオラント（両手を広げた祈りの姿）の女性を表しており、そのうちの1体は聖母マリアを表している（図10）[19]。もう1体のオラントの女性像はヴェールを被っており、破損している。他の2体の大理石板（1 m 05×0 m 86×0 m 04）は、それぞれ「アブラハムによるイサクの犠牲」と「ライオンの穴の中のダニエル」を主題とした線刻画が表されている。これらの線刻画大理石板がいつから墓室内にあったのか、もともとの機能は何であったのか、謎は解明されていない。

図10　聖母マリアを表す線刻画大理石板（*D'un monde à l'autre. Naissance d'une Chrétienté en Provence IVe–VIe siècle*, Arles, 2001, p. 172）

1993年、サント＝マリー＝マドレーヌ聖堂の西正面玄関外の空間に、古代末期の聖堂と洗礼堂の遺構が発見された。発見された聖堂は、早ければ5世紀前半に半地下墓地の30mほど南に建設され、次いで500年ごろに、その西ファッサードに隣接する形で洗礼堂が建てられたと発掘により推定されている[20]。近辺には古代の墓地の痕跡が発見されており、古代末期の聖堂は、半地下墓地を建てた地元有力者の一族が、家族墓の近くに建てた私的な聖堂であったのだろうと推定される。そしてその数十年後に洗礼堂が建てられているが、それはこの私的聖堂が地域の小集落の小教区的な教会堂としての性格を持つようになったことを示している。初期中世、この聖堂はサン＝ヴィクトール修道院の従属教会となり、12世紀まで存続した。「マグダラのマリアの墓室」に伝わっている線刻画大理石板は、よって、古代末期の聖堂内の何らかの装飾設備であり、サン＝ヴィクトール修道院従属教会となってからもこの場所に引き継がれてきていたと推定することが可能である。おそらくこの線刻画の存在によって、この地域の人々はこの場所が非常に古い起源を持つ場所だという認識を持っており、そうした古さの認識が、13世紀末の「聖なる墓室」の「発見」につながったのではないか。

おわりに

サン＝マクシマンのサント＝マリー＝マドレーヌ聖堂は、プロヴァンス地方のゴシック建築を代表する建物のひとつであるが、その規模は現在のこの町の人口に比べてあまりに巨大である。未完成のまま工事が終了した西正面は、その武骨な大きさを強調する。聖堂の外側にも内部にも修復工事のための足組が組まれていたが、これだけ巨大な聖堂を維持管理していくことは大変な責務であろう。聖堂の中の土産売り場には、いまでも巡礼者のために聖遺物が売られており、真正証明書も付けられている[21]。とはいえ巡礼地の信心深い熱気は、数百年昔とは比較にならないであろう。結局完成に至ることができなかったサント＝マリー＝マドレーヌ聖堂の巨大さは、13世紀末に「マグダラのマリアの墓室」が発見された当時の宗教的情熱の激しさがいかほどであったかを思わせる。そして信仰心に動かされ、王侯貴族から庶民までの数限りない人々がこの地を訪れてきた。

サン＝マクシマンとサント＝ボーム山のマグダラのマリア信仰に関する文化財は、現在、学術的な真実と信仰の価値の両立が難しい事例となっている印象を与える。その理由として、芸術的側面、歴史的側面、さらには学術的研究成果の活用などの観点から、考察が可能であろう。たとえば、ヴェズレーや、あるいはサンティアゴ・デ・コンポステッラのような巡礼地と比較して、サント＝マリー＝マドレーヌ聖堂やマグダラのマリアの洞窟は、芸術的価値に関して格段に劣ることは否めない。信仰の歴史だけでなく、優れた芸術の存在が文化財としての価値を高め永続化させるのだとあらためて考えさせられる。この地のマグダラのマリア信仰の実際の起源が13世紀末と新しく、伝説の「神秘性」が比較的たやすく損なわれ得るということも理由としてあるだろう。

近年の学術的研究成果はほとんど現地では活用されていない。1993年の発掘により発見された古キリスト教時代の洗礼堂や聖堂の遺構は、埋め戻され、西正面前にはがらんとした広場の空間が広がっており、何の情報掲示も見つけることはできなかった。バシリカ内に設置されているポスター展示には、考古学的発見についての若干の記述があるが、その簡潔な文面の中には、マグダラのマリア伝説に抗わないような、学術的には若干怪しい部分が散見される。この発掘で発見された遺物は倉庫にしまわれたままであり[22]、さらに、貴重な5世紀の線刻画大理石板については、辛うじてその存在を確認できる程度の状態でクリプト内に置かれている。

プロヴァンス地方が、地中海西域において特に早期にキリスト教の布教が広がった場所のひとつであることは疑いの余地はない。この地方に残された古代の痕跡と、変形されつつも伝わった一定の記憶があったがゆえに、ラザロとその姉妹たちの伝説がこの地方で花開き、大きな普及力を持って内外に誇示されたのであろう。

原始キリスト教時代の信仰を呼び起こす場所として、むき出しの高い岩壁と古い森に囲まれたサント＝ボーム山は、どこよりもふさわしい場所であった。その「場所の力」は、現在訪れても充分に感じとることができる。深い森の道をたどり、乾燥した石灰岩の岩壁を見上げ、たどり着いた深い洞窟の奥には、泉の水が滴り流れる。深い宗教的感情を喚起する場所である。純粋に巡礼を目的としてこの場所を訪れる人々は今後さらに減っていくだろうと予想されるが、とはいえ、豊かな歴史を持つこの宗教文化財の魅力は保持され得るはずである。そのためにはまず、自然の保護を徹底することが最重要であろう。また、学術的研究成果を積極的に活用する方向に転換していくことが、より文化財としての価値を将来的に高めるのではないかと考える。たとえば、サント＝ボーム山北の平野の中にそびえるサント＝マリー＝マドレーヌ聖堂は、中世後期の激しい宗教的希求の壮大な記憶である。そこに保存される線刻画は、プロヴァンス地方に残される古キリスト教時代から実際にこの地に残されてきた雄弁な時代の証言であり、美術史的にも稀少で優れたものである。「学術的価値」は、かつて人々を引き付けたマグダラのマリア伝説ほどに強力な魅力を持たないことは確かである。けれど、さらに世俗化していく現代に、伝説に関する歴史的経過の事実とその重要性を丹念に人々に明確にすることは、より永続的な価値を文化財にもたらすはずである。

《注》

（1）　この覚書は、2018年7月14日に熊野にて開催された第42回地中海学会全国大会での筆者の口頭発表を土台としている。

（2）　J. de Launoy, *De commentitio Lazari et Maximini, Magdalenae et Marthae in Provinciam appulsu dissertatio*, Paris, 1641. Cf. V. Saxer, *Le culte de Marie Madeleine en Occident des origines à la fin du moyen âge*, Paris, 1959, p. 7.

（3）　L. Duchesne, « *La légende de Sainte Marie-Madeleine* », *Annales du Midi: revue archéologique, historique et philologique de la France méridionale*, T. 5, N° 17, 1893, pp. 1–33.

（4）　V. Saxer, *Le culte de Marie Madeleine …*, pp. 8–9.

（5）　F. Benoit, « Le martyrium de l'abbaye de Saint-Victor », *Provence historique*, 1966, pp. 259–296.

（6） J.-Ch. Moulinier, *Autour de la tombe de saint Victor de Marseille*, Marseille, 2000.

（7） M. Fixot, « Saint-Victor, saint Victor, à propos d'un livre récent ». In: *Marseille, Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René. Actes du colloque international d'archéologie, Marseille, 3-5 novembre 1999*, Aix-en-Provence, 2001, pp. 235-254.

（8） International Council of Museums（ICOM）, *Code of Ethics for Museums*, 2.5, 3.7, 4.3: https://icom.museum/wp-content/uploads/2018/07/ICOM-code-En-web.pdf. イコム日本委員会による邦訳は、https://icom.museum/wp-content/uploads/2018/07/ICOM-code-En-web.pdf.

（9） *Les reliques. Objets, cultes, symboles. Actes du colloque international de l'Université du Littoral-Côte d'Opale*（*Boulogne-sur-Mer*）, *1997*, E. Bozóky et A.-M. Helvétius（éds.）, Turnhout, 1999.

（10） A. Ozoline, *Trésors de la Gaule chrétienne: histoire et restauration des reliques textiles de saint Césaire d'Arles*（*470-542*）, Arles, 2008.

（11） Cf. 拙稿「マルセイユのサン＝ヴィクトール修道院教会堂クリプト」『世界史の研究』256、2018、pp. 26-33.

（12） M. Fixot, R. Bertrand, J. Guyon, *Saint-Victor de Marseille. Le guide*, Saint-Laurent-du-Var, 2014.

（13） プロヴァンス地方の聖人伝説について言及している文献資料は数え切れない。マグダラのマリア伝説については、V. Saxer の前述の著作の文献一覧を参照。

（14） V. Saxer, *Le culte de Marie Madeleine* ... 1959, pp. 95-126.

（15） M. Chalvet, « Débats et contestations autour des aménagements forestiers d'un 'haut lieu': la forêt domaniale de la Sainte-Baume », *Les Cahiers de Framespa*, 13, 2013.（https://journals.openedition.org/framespa/2250）

（16） とはいえ、サント＝ヴィクトワール山のグラン・シット指定や国立自然保護地区 Réserve naturelle nationale（RNN）指定、あるいはヴェルドン渓谷のフランス地方自然公園指定、さらにはカランクの国立公園指定など、プロヴァンス地方の主なる自然遺産の種々の自然保護地区指定に比べると、サント＝ボームの保護指定はずいぶんと遅い。

（17） たとえば1860年ごろ、マルセイユからサント＝ボーム山まで、朝7時に鉄道で出発し、オーバーニュから乗合馬車でサン＝ザカリーまで2時間、その後サント＝ボーム山の聖地まで、さらに馬車などで2時間の行程だった：*La Sainte-Baume*, Impr. de Troyes, Toulouse, 1860.

（18） P.-A. Février, «Saint-Maximin. Mausolée antique», in *Les premiers monuments chrétiens de la France, 1, Sud-Est et Corse*, Paris, 1995, pp. 175-180; M. Fixot, *La crypte de Saint-Maximin-la-Sainte-Baume. Basilique Sainte-Marie-Madeleine*, Aix-en-Provence, 2001.

（19） 「イェルサレムの神殿の仕え女、処女マリア *Maria Virgo minester de tempulo Gerosale*」という碑文が女性図像の上方に刻まれている。

（20） J. Guyon, M. Fixot, F. Carrazé, « Les premiers monuments du culte chrétien à Saint-Maximin. Bilan de deux campagnes de fouilles（1993-1994）», *Bulletin de la Société des amis du vieux Toulon et de sa région*, 1995, no. 117, pp. 30-47; M. Fixot, F. Carrazé, « Saint-Maximin, Basilique Sainte-Marie-Madeleine », *Congrès archéologique de France, 160e session, Monuments du Var*, 2002, Paris, 2005, pp. 231-241.

（21） 販売されている聖遺物は、マグダラのマリアの「遺骨」とある程度の期間接触した布の小さな断片であり、ガラスや金属の容器の中に入っている。日本円で2万から3万円くらいの値段が主流。

（22） 発掘資料や出土品は2005年ごろまでサン＝マクシマン市内にあつらえられた小さな博物館に展示されていた。「人間関係の問題のために」、現在博物館は完全に撤去され、全ての資料は県の考古倉庫にしまわれたままであると関係者から聞いている。